
月明かりが照らす公園で

葛城ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月明かりが照らす公園で

【Nコード】

N4765N

【作者名】

葛城ひなた

【あらすじ】

塾の帰り道に通り抜けようとした公園で、俺と彼女は出会った。街の幽霊の力を借りて、迷子の幽霊——マユの情報を集める。果たして彼女は一体どこの誰で、何故幽霊になってしまったのか。

「はい、残念。そんなんじや全然おどろおどろしくないし、誰も怖がってくれないぞ」

「うう、そんな事言われても……そもそも真人くんの神経が図太過ぎるんだよ」

俺が重たいため息をつきながらダメ出しすると、ダメを出された本人が少しだけ涙目になって呻いた。現在俺達がいるのは、俺の家から十分程歩いたところにある公園。すでに周りの風景は夜の暗闇にのまれてしまっている。俺達が今座っているブランコがある部分は、チカチカと点滅している街灯が頼りなくだが照らしてくれているおかげで、多少はマシだけれど。

何故俺——『新条 真人』がこんな夜遅くに公園なんかにいるのかというと、目の前にいるマユという女の子に出会ったのがきっかけだった。いや、女の子って言うとなんか少し弊害があるのかもしれないけど、それはまあさておいて。

マユと出会ったあの日、俺はいつもと同じ様に通っている塾の授業を聞き流して、家に帰るためにこの公園を通り抜けた。本当は大回りから帰ったほうが明るいし、人通りも多いから安全だって母さんは言うんだけど、この公園を通り抜けた方が格段に近道だから。

そして薄暗い公園の中を少しだけビクビクしながら歩いていると公園の中心に薄っすらと人影があるのに気付いて、俺は緊張に身を硬くした。だってもう結構夜も遅いし、普通に考えてこんな寂れた公園に人がいるなんて思ってもみなかったから。

けれども、そんな恐怖と緊張感は一瞬の内に消え失せて、俺の心に違う感情が満たされていく。

その人影が月明かりでぼんやりと浮かびだすと同時に、どういう仕組みなのかその時はまったくわからなかったが、まるで蛍みたいな薄ぼんやりとした丸い光が、人影の周りをたくさん飛び回り始めたのだ。その光景がまるで映画か何かのワンシーンみたいに神秘的に思えて、俺はいつしかその光景に目を奪われていた。

そして何より、暗闇から光を当てて浮かび上がってきた人影が、少女の物である事に驚いた。もうすぐ夏休みとは言え、夜は昼間に比べれば少し冷える。それなのに彼女は白いワンピースと茶色いサンドルしか身に着けていなくて、俺は他人事ながら風邪をひかないだろうかと少し心配になった。

訝しさ半分・心配半分が混ざった、俺の視線に気付いたのだろうか。多分同い年くらいの少女がふとこちらに目を向けたので、俺は慌てて視線を逸らすと彼女に小さく会釈した。

じつと見てるのが失礼になるかもって考えたのと、あとは恥ずかしながら女の子と会話し慣れていない非モテ男子の悲しい性だ。

その他にも言い訳するならもう夜も遅い時間だし、もしかしたら少女に変質者の類と間違われるかもしれないと思ったのもひとつの理由だったりする。もし俺が彼女の立場だったら、こんな夜更けに自分の事をジツと見てる男がいたら、いきなり変質者だとは思わなかったとしても、やっぱり気分が悪いだろうと思うから。

でも少女から帰ってきたリアクションは、俺の想像のどれとも違うものだった。まるで珍しいものでも見る様に俺の顔をじつと見つめて、心なしかその表情に嬉しさの色が見え隠れしている。

大きな瞳がパッチリ開いてて、顔の造形ひとつひとつが整っている。暗がりでも光源がしょぼい蛍光灯の街灯と彼女の周りを飛び回る小さな光たちしかなかったけど、何故かそれだけははっきり認識できてしまった。これも悲しい男の性というやつだろうか。

そんな事を考えているとは知ってか知らずか、彼女は俺に飛び掛る様な勢いでこっちの方に走ってくると、瞳をキラキラと輝かせてこんな事を言い出した。

「あのあのっ、私の姿が見えるんですか!？」

「……………ハア？ アンタ、何言ってるの？」

ふわりと長い髪を舞い上がらせて変な事を言い出したこの女の子に、長い間を空けて搾り出すようにして俺が返した答えは、至極真つ当たったと今でも思っている。

だがそんな俺の言葉を気にした様子もなく、興奮した様子で彼女は続けた。

「うわー、うわーっ！ 声も聞こえるんですね？ すごいです……今までずっとみんなに無視されて、誰ひとりとして私を見つけてくれなかったのに。あなたが初めてなんです、私をしっかりと見てくれて、そして返事を返してくれた人っ！」

その言葉を聞いて『イジメられっ子なのだろうか』と思った俺は、なんというかやはり正常な思考の持ち主だと思う。考えていた事がそのまま表れて、きつと俺の顔には怪訝そうな表情が浮かんでいたんだろっけれど、それを気にする余裕がないのか彼女は一生懸命にまくし立ててきた。

「もうね、ホントに酷いんですよ、みんな！ 私ってなんだか知らないうちにこの場所にいたんですけど、どんなに話しかけても無視するんだよ!!。ヒドいと思わない!？」

余程腹に据えかねていたのか、最初は敬語だった彼女の口調が、途中からタメ口になっている。顔を真っ赤にしながらこちらに詰め寄って同意を求める少女に押されて、俺はコクコクと首を縦に振りながらも、その強引な近付き方に『男への警戒心はないのだろうか』と心の中でツッコミを入れた。

「はあゝっ、いつか優しい人が見つけてくれるって信じててよかった。ねえねえ、あなたの名前はなんていうの？」

先程までのちよつと怯えた様子は消し飛んで、彼女はタメ口の勢いそのままに尋ねてきた。

「新条真人だけど……ってそうじゃなくてだな」

「わあ、真人くんっていうんだ。いい名前だね。私はマユだよ、よ

ろしくね」

人の話なんか聞いちゃいない。ニコニコと笑って細っこくて小さな右手を差し出しながら、彼女は俺にそう名乗った。

そのテンションの高さに押されて反論する気力すら無くした俺は、もうどうにでもしてくれと彼女が差し出した手を握ろうとしたその時、とんでもない事が目の前で起こったのだ。

スカッ！

「……………あれえ？」

当然伝わってくるだろうと想像していた、彼女の手の柔らかさとか温もりが、まったく俺の手には感じられなくて。思わずマユの顔に視線を向けると、彼女もまた不思議そうな表情で俺を見つめていた。そしてタイミングを計ったみたいに二人同時に自分達の手がある場所を見ると、なんと俺の手に重なっているはずの彼女の手が、俺の手のひらを通り抜けて指先が手の甲の方に突き抜けていた。

現実にありえない光景を目の当たりにして、理解が追いついていなかった頭がぐるんぐると回り始める。こんな状況に今までなかった事なんて一度もないし、あるとしたらマンガやアニメの中でだけだ。

けれども俺が取り乱そうとするよりも前に、その原因のはずのマユが真っ青な顔色をして、継る様な表情で俺を見つめていた。

「何…………コレ。なんで私、あなたに触れないのかな？　これって、夢？」

「いや、それを聞きたいのは俺の方なんだけど」

どこで聞いたのかは忘れたけれど、自分がパニックになる寸前に他の人間がパニックになると、平常心を保っていられるらしい。どうやらそれが事実だったらしいと頭の片隅で考えながら、俺はとりあえず今できる事として一番建設的だと思う提案をする事にした。

「とにかくさ、まずは落ち着いて話そうよ」

とりあえず家族を心配させない為に『友達と話してるから帰るのが遅くなる』と携帯で連絡してから、俺とマユはお互いに身の上話などをしながら、現状の把握に努めることにした。

それによるとマユは、自分の名前以外はなんにも覚えていないらしい。どこで生まれてどこで暮らしていたのか、そこでどんな生活をしていたのか、もちろん自分の家族がどんな人達だったのかさえ記憶に残っていないのだ。そして唯一記憶の中にあるマユという名前ですえ、自分の本当の名前だという確証はどこにもなかった。

記憶喪失だけならまだしも、彼女にはもうひとつの問題が残されていて、どちらかと言えばこっちの方が大問題だと俺はひそかにため息をついた。何故なら、冷静になって彼女の体をまじまじと眺めてみると、うつすらとだが向こうの景色が見えてしまうのだ。

こんな状態、普通に考えたらこういうしかないよなあ、とため息をつきながら、きつぱりと事実を突きつけた。

「あんた、幽霊なんじゃないか？」

「ゆ、幽霊っ!？」

俺の告げた言葉をオウム返しにしたかと思ったら、マユは顔を真っ青にしてキョロキョロと周囲を見回す。そして多分俺にしがみ付こうと思ったんだろうけれど、俺の体に触れられない事を思い出したのか、マユは両手で自分の体をぎゅうつと抱き締めた。

「……幽霊が幽霊を怖がるなんて話、聞いた事ないぞ。ほら、幽霊は幽霊らしく、ちゃんと幽霊としての自覚を持たないと」

「もう、いじわるっ。ユーレイユーレイ連呼しないでよ!」

俺がからかう様に言うと、マユは聞きたくないとばかりに両耳を塞いで、イヤイヤと首を乱暴に振った。

「でもそう考えれば納得がいくと思わないか? なんで記憶がないのかって事と、俺にだけマユが見えるのかって事を除けば、一応の

説明はつくじやないか」

「そんな事言われても、突然あなたはユーレイですなんて言われて、真人くんはすぐに納得できるの!？」

涙目でズイツと詰め寄ってくるマユに、俺はガシガシと後頭部をかきながらわざとらしくため息をついた。普通ならムツとしてもおかしくない言われようだったが、何故だか俺はマユの言葉に怒りは感じなかった。

ただと言わなきゃいけない事はきちんと伝えないと、と少しだけ厳しい表情を態と浮かべて彼女をしっかりと見つめた。そして噛んで含める様にして彼女に告げる。

「うん、確かにマユの今の状況には同情するし、可哀想だとも思う。俺がマユの立場だったら、きつと同じくらい動揺するだろうし。でもさ、冷たい言い方かもしれないけど、俺には関係ない話だよな、これ。それでもこうやって話を聞いて、マユの状況を鑑みて一応の結論を出した人間に、そういう言い方ってないんじゃないか」

「そ、それはそうだけど……だって不安なんだもん。怖い話なんて大嫌いなのに、そんな私がユーレイになったなんて聞いたら、びっくりするに決まってるじゃない。それに、やっと頼れる人と出会えたんだもん、ちょっとくらい甘えたっていいんだもん!」

そう言々とマユは、大きな瞳からポロポロと大きな涙を零し始めてしまった。

こうなると、俺としても厳しい事は言えなくなる。昔から、男は女の子の涙にはどうやって勝てないという名言があるのだ。

「甘えてくれてもいいけどさ、とりあえず当事者はマユで俺は協力者なんだって事は、常に頭の中に入れておいてもらえると助かる。これからどうするにしても、マユ自身の事なんだからマユの意思が大事なんだよ。マユが決めて、俺が手伝う。このスタンスだけは変えられないから、覚えておいてくれよ」

俺がそう言くと、マユは最初はまるで何を言われたのか理解できないみたいにポカーンとした表情を浮かべていたけれど、言葉がだ

んだん染み入ったのかポロポロと涙を零し続けながら、うんうんと大きく頷いた。

「ほら、そろそろ泣き止んでくれないと、俺がイジめてるみたいじゃないか」

「えへへ、ごめんね……でも、なんだか真人くん、お兄ちゃんみたい」

泣き笑いの表情でそんな突拍子のない事を言い出したマユに、俺はほんの少し照れくさくなって『バーカ』と小さく返した。

「さてと、そろそろ帰るか。マユはどうするんだ？　ここに残るか、それとも……一緒に来るか？」

「え、ええっ！？　いいの？　私ユーレイ、なんだよね？　迷惑じゃない、かな」

「祟ったり呪ったりしないなら、俺は別にいいけど。どうせ俺以外には見えないんだろ、マユの姿って。だったら家族にもゴチャゴチャ言われなくていいから、遠慮しなくても大丈夫だぞ」

そりゃあ幽霊だって事を考えるとちょっとは不安になるけれど、でも目の前にいるマユを見るにこいつが祟ったり呪ったり、俺や家族に危害を加える様なヤツには思えない。

「お人好しだね、真人くん」

「ほう、だったらここで一人で寝るか？　この真っ暗で人通りのほとんどない公園で」

「やだやだ、もうビクビクしながら一人で我慢するのやだよ！　ごめんなさい、お世話になります……！！」

触れられないのにまとわりついてくるマユをなだめながら、俺は歩き慣れた帰り道をゆっくりと歩き始めた。

突然の出会いから始まった、ちよつと変わったユーレイとの交流。まさかここから、普通の人生じゃ味合えないくらい不思議体験のオンパレードになるとは思ってもみなかった。

いやー、不思議っていうのはこんなにも日常に溢れていたんだなあ。

泣かせてしまった罪悪感と、あとほんの少しだけ『幽霊でも涙を流せるんだな』なんてバカな事を考えながら謝ると、マユはポロポロと瞳から涙を流しながらも、とても嬉しそうに微笑んだ。

ドキン。

そんな屈託のないマユの笑みに、俺の心臓が大きく高鳴った。その笑みがあまりに純粹だったからか、それとも俺に女の子に対する免疫があんまりなかったからなのか、どちらにしても俺がその笑顔に一瞬心を奪われたのは間違いない。

そして俺の意思とは関係なく、口から勝手にこんな台詞が零れていた。

「俺でよかったら、あんまり役には立たないかもしれないけど、それでもよかったら力になるよ」

あんな風に言われた直後に、まさか協力してくれると言い出すとは思っていなかったのだろう。マユはきょとんとした表情で俺を見ると、それから信じられないといった表情で何度も何度も『ホントに?』と聞き返してきた。

「……手伝わなくていいなら、それでもいいけど?」

「あ、ううん! 手伝ってください、お願いします!」

俺が冗談でそんな事を言うと、マユはわたわたと慌てながらもそう言っ、ぺこんと頭を下げた。こうして俺と幽霊らしくない幽霊、マユとの友人関係はスタートする事になった。

幽霊だと自覚したマユは、自分のお仲間——つまり幽霊を探し始

めた。彼女が目覚めて一ヶ月、生きている人間で彼女を知覚できたのは俺一人な訳だから、もしかしたら探せば他にも彼女を見ることが出来る人間はいるかもしれないが、可能性は限りなく低いだろう。その点、もし彼女の他にも幽霊が存在しているとしたら、同じ幽霊同士なのだからマユを知覚できる可能性は、人間と比べて極めて高い。

そんな彼女の一日の行動を、俺はいつも通り塾の帰りに公園に立ち寄って、ベンチに座って聞くのが日課になっていた。その話によると、やはり幽霊は俺達人間の目には見えないけれど、結構な人数が街の中にいらっしやるそう。だけど、幽霊嫌いの幽霊であるマユは、どうしても自分から話し掛けられなくて、いつも二の足を踏んでしまうらしい。そんなマユにハッパを掛けて続けて二週間。忘れもしない夏休みの初日、いつもの様に公園にやってきた俺に、マユは興奮した笑顔で言った。

「あのね、あのねっ！ 今日お友達ができたの！」

「友達って……じゃあ、ついに話しかけられたんだな、幽霊に」

「うん」こわかったけど、話したらとってもいい人だったよ。タケヤマさんって言うんだけど、その人はこの辺の幽霊仲間の中じゃ結構顔が広いらしくて。誰か私の情報を持ってないか聞いたってやるって言うてくれたの」

マユの話を聞きながら、やっぱり幽霊達にも独自のネットワークみたいなものがあるのだろうか、俺は頭の片隅でぼんやりと考えていた。

俺はマユの話を聞いてあげる事しかできなかったけれど、どうやら本当にタケヤマさんは、この辺りの幽霊達のまとめ役みたいな事をしているらしくて、新入りのマユに丁寧に幽霊の常識を教えてくれたらしい。恐るべし幽霊ネットワーク。

そんなタケヤマさんを通じて、今ではマユにも広範囲に渡って、幽霊友達がたくさんいる。そのおかげで、マユが一人でいる孤独を味わわなくて済む様になったのはいい事だけど、今度は別な問題が

表面化したのだ。

それは、俺がマユにタケヤマさんを初めて紹介してもらった時に、言い様の無い違和感を感じたのが始まりだった。

『初めまして、タケヤマです』

誰もいない空間が揺らいで、頭の中に直接声が響いたと同時に、白い着物を身に着けたちよんまげ頭の男の人が、俺の前に立っていた……いや、ぶかぶかと宙に浮かんでいた。

「真人くん、この人がタケヤマさんだよ」

「知ってるよ。つーか、今本人が自己紹介したばかりだろ」

嬉しそうにタケヤマさんを紹介するマユにからかう様に言うと、俺はタケヤマさんに向かってぺこりと頭を下げた。例え幽霊だったとしても、やっぱり友達が世話になってるんだから、きちんと礼儀正しく挨拶するのが当然だろうと思ったから。

「初めまして、新条真人です。いつもマユが世話になってます」

『ああ、いえいえ。マユちゃんは素直ないい子ですから、みんなが好きで構ってるだけです。気になさらないでください』

嘘なんて全く混じっていないタケヤマさんの言葉に、俺は安心しながらも少しだけマユを取られた様な、そんな寂しさを感じている自分に気付いた。でも、それは自分勝手な独占欲だとわかっていてから、そんな気持ちを飲み込んでタケヤマさんに尋ねる。

「でも、タケヤマさんとマユは同じ幽霊なのに、着てる服とか全然違うんですね。それに、マユは地面からあんまり浮かんで無いのに、タケヤマさんはぶかぶか自由に浮いてるし。やっぱり幽霊としてもキャリアも関係あるんですか？」

『はは、どうでしょうね。でも、キャリアならそんじょそこの幽霊には負けるつもりはありませんけどね』

タケヤマさんは冗談めかしてそう言うと、今思い出した様にマユに向かってこう言った。

『ああ、そう言えば。マユさん、今日は三丁目の稲垣のおばあさんとお話をする約束をしていたのではないですか？ あの人はずっか

ちですからね、早く行かないとねぐらに帰ってしまいますよ?」

タケヤマさんのその台詞に、俺は少し引つかかるところを感じて、タケヤマさんをじっと見つめた。確かに『幽霊がそれぞれねぐらを持っているのか』とか『幽霊って眠るの?』とかいうつまらない疑問はたくさんあったけれど、そういう事じゃなくて。

もしかしたらタケヤマさんは、マユがいてはできない話を俺にしたいんじゃないか、そう考えたのだ。そして俺のその考えを肯定する様に、タケヤマさんは俺に向かって小さく頷いた。

「確かにそうですけど、でもせつかく真人くんが来てくれてるのに……」

俺の顔にチラチラと視線を向けながら、迷いが含まれた声でマユがつぶやく。本当はここで俺に『行くな』って言うて欲しいんだろうけど、今はタケヤマさんの話を聞くのが先だと思った俺は、心の中でマユに手を合わせながらマユが欲しい言葉とは正反対の言葉を言った。

「まあ、俺とは明日も会えるんだしさ。今日はそのおばあさんの所に行ってきたよ。約束してすっぱかしたりしたら、マユの評判が悪くなるかもしれないだろ?」

「だって、別に何時につてちゃんと時間まで決めてた訳じゃないんだよ?」

「でも、タケヤマさんも言うてただろ? おばあさんがマユを待ちくたびれて帰ってしまうかもしれないって。それに、やっぱり若いヤツが目上の人間を待たせるのは、礼儀上よくないと思うぞ」

俺が真剣な表情でそう言うのと、マユは何故だか急にくすくすと笑い出した。

「あはは、真人くん……意外と礼儀とか、そういうのにうるさい人だったんだね。なんだか似合わない」

「何気に失礼なヤツだな。そんな事はどうでもいいから、早く行ってきたな」

俺がわざとムツとした表情で言うと、マユは楽しそうに笑いなが

ら公園から出て行った。そして俺とタケヤマさんがその場に残されたのだが、マユがいなくなってもタケヤマさんは何も言おうとはしない。

しばらくは彼が話し出すのを待っていたのだが、いい加減痺れを切らしてこちらから水を向ける事にした。

「タケヤマさん、何か俺に話があるんじゃないですか？」

『……申し訳ありません。どう切り出そうか、悩んでいたんですよ。これを君に話していいものかどうか、私自身も迷ったのですが』

「マユに関する事なんですよ。だったら、教えてください。俺、あいつの力になりたいんです」

その言葉は、俺の本音だった。確かに、出会った時はどちらかというと突然こんな状況に追いやられたマユに対する同情心が大半で迷子の子供を家に帰してやりたいっていうのと、同じ様な気持ちだったと思う。

でも、こうして一月程マユと一緒に過ごして、俺はあいつと一緒にいる事が楽しいって思い始めている自分に気がついた。受験のための夏期講習はあるけれど、比較的自由に俺が動けるのは、この夏休みの間だけだ。あいつが心を許してくれる友人として、なんとかマユの素性くらいは、この夏休み中に見つけてやりたい。心からそう思っていた。

タケヤマさんは俺の言葉を信じてくれたのか、少しだけ表情を和らげて言った。

『マユさんは、いい友人を持ちましたね……これから言う事は、まだマユさんの耳には入れないでください。ぬか喜びさせてしまうのは、可哀想ですからね』

タケヤマさんの言葉に、俺はしっかりと頷いて、彼が話を話すのを待った。そして彼の口から出てきた言葉は、俺を驚愕させるのに充分な程の威力を持っていたのだった。

『彼女は、私達の様に死んで幽霊になった者ではなく、生霊なのだと思います』

俺は次の日から受験勉強の時間を割いて、公衆電話から近くにある入院施設のある病院に、片っ端から電話を掛けた。マユという名前で、意識不明の患者がいらないかどうか、それを確かめるために。

しかしやはり名字がわからない上に、そうそう入院患者のプライバシーな質問には答えてくれない。個人のプライバシーや個人情報的大事にされる昨今だから仕方が無いのかもしれないが、今の俺にはそれが大きな壁になって立ち足はだかつていた。

タケヤマさんが何故マユを生霊だと判断したのか。そこには彼の主観ではあるが、それなりに信憑性のある理由が存在していた。

まず第一に、タケヤマさん達の足は太もものところから下はぼんやりと霞んでいて見えないのに、マユは履いているミュールまでしっかりと視認できるところだ。これは俺も二人を見比べた時に違和感を感じたので、すんなりと信じる事ができた。

第二に、タケヤマさん達みたいな普通の幽霊は自分達の意味で人間——つまり俺達に自分の姿を見せる事ができるが、マユにはそれができない。じゃあなんで俺にはマユの姿が見えたのかっていう疑問が新たに浮かんでくるが、精神体にも波長というものがあって、それがうまく俺の波長と一致したのではないかというのが、タケヤマさんの推論だった。

そして最後に、マユの記憶がない事をタケヤマさんは理由としてあげた。普通はそれなりにこの世に心残りがある人が、幽霊としてこの地上に留まる事がほとんどなんだそうだ。成仏せずに、孤独を味わうにも関わらずこの世に留まってしまうのだから、その心残りが余程強い想いだという事は、想像に難くない。

でも、マユは違う。何故自分がここにいるのかもわからないのだ。つまり幽霊になってまでこの世に留まりたい理由というのが、彼女

にはないのである。

これらの理由から、タケヤマさんは彼女が事故や病気で現在意識不明にある少女の生霊なのではないか、そう結論付けた。

『私は他の方々に手伝ってもらって、マユさんの情報を探してみます。真人さんは、病院の方をお願いできますか？ 私達は生に強く関わる場所には近づけないし、人間に対して迂闊にコンタクトを取る事はできませんので』

確かに、人間に見つかからない様に情報収集できるタケヤマさん達の方が、色々なところに出入りができるだろうし。その提案に異論はなかった。

こうして俺は、昼間は病院を巡ってマユを捜し、夜は塾とマユに会うというハードスケジュールをこなす事になった。マユは俺達が裏でこそこそと何かをやっているのを察知したのか、最初はひどく疑惑のこもった視線を俺に向かって投げかけてきたのだが、それはタケヤマさんが取り成してくれて、なんとか事無しを得た。

ただ、その時にタケヤマさんが言った『幽霊たるもの、人間を怖がらせる様になってこそ、一人前ですよ』という言葉のせいで、俺はマユが人間を怖がらせるための特訓の相手をするハメになってしまった。

こうして冒頭の会話に戻る訳だけど、マユはその外見通りぼんやりとしている性格だから、ホラー映画の幽霊やゾンビ達のように人間達を怖がらせるなんて、到底無理な話だと俺は思う。

俺が素直にそう告げると、ムキになって色んな顔を見せるマユが面白くて、ついついからかってしまうのだ。ほっぺをむにゅっと両手で押してみたり、口を指でピローンと引っ張ってみたり、途中からにらめっこ勘違いして笑うマユを見てみると、俺も自分の顔に知らないうちに笑顔が浮かべていることがある。

そんな俺達の特訓は、すでにこの辺りの幽霊達全員に知られていて、時々すうっと暗がりから姿を見せては、俺達を冷やかすのだ。

『ヒューヒュー、マユちゃん彼氏とデートかい？』

『若い者はいいのう。わしも昔はじーさんとよくそんな様子で海辺なんかで語り合ったもんじゃ』

こんな風にわざわざ俺にも聞こえる様に、姿を見せて冷やかしてくるのだから性質が悪い。特に彼等の標的は隣のマユのようで、彼女は幽霊達の冗談に顔を真っ赤に染めて、全力で首を振って否定するのだ。

「そ、そんなんじゃないですよーっ。真人くんは、私の特訓に付き合ってくれてるだけなんですから、そんな風に言ったら真人くんに失礼ですよ！」

そこまで力を入れられて否定されると、男としては少し複雑な気分になる。でもそんな気持ちよりも、真っ赤になって否定するマユが可愛いと思ってしまうのだから、俺も相当精神的に病んできているのかもしれない。相手は生霊——もしくは本物の幽霊かもしれないが、そんな相手でもいいと、半ば本気で想い始めている俺が心の中にいる事を、はつきりと認識し始めていた。

マユと別れて家に帰るまでの道すがらに、俺はタケヤマさんとその日得た情報を交換し合う。口には出さないが、どうやらタケヤマさんの指示で動いてくれている幽霊達の数は、かなりの数になるみたいだ。

それだけの幽霊達に支持されているタケヤマさんが、一体いつから幽霊をやっているのかと気になって思い切って尋ねてみたのだが、タケヤマさんは『秘密ですよ』と子供みたいな悪戯っぽい表情で笑った。

そんな風に俺達はマユの情報を必死に探しながら、日々を過ごしていた。けれど、なかなか有力な情報は入ってこなかった。きつとこれまでの俺だったら、自分の行動がなかなか実らない事にイライラして、遅かれ早かれクサっていただろう。でも、今の俺はそんな

マイナスな気分には全くなかった。気になる存在であるマユのためだからっていうのも、多分理由としては正しいんだろうけど。でも、こうして俺が今やっている行動が、全部無駄じゃないって思える……そんな気持ちで、俺のアクションを一定のところを保っている一番の原因じゃないかって自分では思ってる。

例えば、片っ端から病院に掛けている電話ひとつにしてもそうだしきちんと話を聞いてもらうには、それ相応の話し方っていうのが必要になってくる。最初はそんな事もわからないで、友達と電話してる時よりちよつと丁寧な感じで話していたのだが、相手は全然取り合ってくれなかった。

そんな相手の態度に腹が立たないって言ったら嘘になるけど、話を聞いてもらえないとマユの事を尋ねる前に電話を切られてしまうから。俺は必死に考えた。こうやったら相手を不快にしないかなとか、少し明るい声で話してみると良い印象を持ってもらえるかなとか。

少しずつ改良を加えた甲斐あって、今ではほとんどの病院でマユという名前で意識不明の少女が入院しているか、いないのかを調べてもらえる様になった。

俺がこれから社会に出て生きていくのに、きっと勉強よりも役に立つ事を実地で経験してるんだと思うと、工夫するのは苦にならない。だってそれらはすべて、俺の血肉になるんだから。

精力的に動き回る俺達の元に吉報が届いたのは、夏休みもあと一週間を残すのみとなった、八月末の事だった。相変わらず近所の公衆電話でテレホンカードを抜き差ししながら電話を掛けていた俺のところ、タケヤマさんがやってきたのだ。

『真人さん、大変です！』

「うおっ！？」

突然のタケヤマさんの登場に、俺が驚きの声をあげてしまったのは無理もないだろう。だって、タケヤマさんは俺の正面にある公衆電話機をすりぬけて、にゅつと俺の正面にその青白い顔を突然出現

させたのだから。正直な話、心臓が止まるかと思うほどビビった。
「な、なんなんスカ、タケヤマさんっ！ いきなり出てきたらビビルじゃないスカ」

俺が体育会系クラブの一年坊みたいな口調で抗議すると、タケヤマさんは慌てて俺から離れて後頭部をスリスリと摩りながら苦笑した。

『あー、いや、申し訳ない。別に真人さんを驚かせるつもりは、なかったんですがね』

「いや、別にタケヤマさんが態と俺を驚かそうとしたなんて思っただけですけどね。それにしても、幽霊って昼間でも問題なく外を歩けるんですね……夜しか動けないのかと思ってた」

『私達は吸血鬼の類とは違いますからね、昼だろうと夜だろうと問題はありませんよ。まあ、人間を驚かせる時は夜の雰囲気結構重要ですから、基本的に夜を選びますがね』

俺がふと呟いた疑問に、タケヤマさんはバカ丁寧に答えてくれた。へえ、そうなんだと納得したのも束の間。どうやら自分の用事を思い出したようで、タケヤマさんが慌てた様に言った。

『そうでした、こんな話を話している場合じゃないんですよ、真人さんっ！ ついに見つかったんですよ、マユちゃんの手掛かりが！
「……なんだってっ！？」

俺はその衝撃発言に、大きな驚きの声をあげてからタケヤマさんにグイッと詰め寄った。本当は肩を掴んで揺さぶってやりたかったけれど、それができない事はマユで一度経験済みだからわかってる。

『ちよ、ちよっと、真人さんっ。落ち着いてくださいよ！ 私もさっき聞いたんですがね、二丁目を縄張りになっている花鳥さんが見たそうです……マユちゃんそっくりの顔をした、女の子を』

「マユそっくりって……でも、マユは幽霊として俺の前に現れたんですよ？」

『話は最後まで聞いてください、真人さん。そのマユちゃんそっく

りの女の子は、きれいな花束を持ってある建物の中に入っていたそうです。その建物っていうのが、ほら、あの丘の上にある大きな総合病院だったんですよ」

タケヤマさんが指差しながら言ったのは、俺達が今いる場所に比べると少し小高い丘にドーンと建っている白い病院の事だ。

「……でも、俺あの病院に真っ先に電話掛けましたよ？ そしたら、マユなんて意識不明の患者はいないって……」

『一体どういう事なのか、私達にはわかりません。でも、これは大きな手がかりになると思うんです。それに私達が出来るのはここまです…… どう頑張っても、私達は病院の中に入る事はできませんからね』

「タケヤマさん……」

『あとの調査は、真人さんにお任せします。私達の大事な仲間のために、そして真人さんの大事な友人のために、もうひと頑張りしましょう』

その言葉に、俺はタケヤマさんに勇気をもらった気がした。マユのために……そして自分のために、これまでこうして頑張ってきた訳だけれど、やはり真実を目の当たりにするのが怖いという気持ち、自分の心の中にあっただと思う。俺の心の中にいつの間にか入り込んできて、そこに居着いてしまったマユの事だから、余計にだろう。

でもここで尻込みしてしまったら、俺やタケヤマさん、それに手伝ってくれた幽霊達がしてきた事が全部無駄になってしまう。

だから、きつちり最後までマユのために、自分のためにやり遂げよう。そう決意を新たにして、俺はタケヤマさんの言葉にしっかりと頷き返したのだった。

そのマユのそっくりさんを見つけた花鳥というサラリーマン風の幽霊に話を聞いて、俺は翌日から彼女が住んでいる家を少し離れた場所から見張る事にした。

何の変哲もない通行人の振りをして、改札を覗いても見たけれど、そこには大きく『大村』という名字しか書かれていなくて、家族の個別の名前はわからない。やっぱりそのマユのそっくりさんに直接話を聞くしか、真実を知る方法はないのだろう。

ジリジリと空から地面をチリチリ焦がす日差しに身を焼かれながら、じいっと大村家の玄関を覗む。脱水症状にならない様に、適度に水分を取りながら二時間程経った頃だろうか。ようやく俺の願いを神様が聞き入れたのか、見つめ続けていた玄関の扉が開き、そこから待ち人が姿を現した。

赤と白のチェック模様のワンピースに、麦わら帽子。そして、マユと同じ色のふんわりとした長い髪。そしてドアに施錠してくるりと回れ右をした時に見えた顔は、確かマユとそっくりだった。いや、そっくりというより、まったく同じだと言った方が正しいだろう。

話には聞いていたけど、自分の目でそれを確認して驚いていた俺を尻目に、彼女はカチャンと門を閉めて歩き始める。そんな彼女に気取られない様に、少しだけ慌てながらも俺は彼女の後を尾け始めた。

そして、バスに乗って十五分。やはり彼女の目的地は、丘の上の総合病院だった。途中で買った花束を両手で抱えて、彼女は自動ドアをくぐって中に入る。五メートルくらい離れて彼女を追いかける自分は、きつと他人から見たら間違いないくストーカーなんだろうなとか、そんなつまらない事を考えてしまう自分に思わず苦笑してしまう。

だが、そんな追いかけてこは唐突に終わりを告げた。彼女がエレベーターホールに向かうのを見て、俺は彼女がどの階で降りるのかわかるために、一緒のエレベーターに乗り込むという大胆な方法を取る事にした。チーンという音を響かせながら到着したエレベーター

は空っぽで、俺と彼女の二人だけがそのエレベーターに乗り込む。

俺はすばやく操作盤の前に陣取って、わざとらしく彼女に問いかけた。

「何階ですか？」

「あ、えつと…… 7階、お願いします」

「はい、7階ですね」

何気ない様子を装いながら、彼女が告げた7階というキーワードを心のメモ帳に書き込みながら、ポチッとボタンを押した。

ゆるゆると扉が閉まり、一瞬ガクンとエレベーターが揺れてから、徐々に上昇を始める。せめてもう少し情報が欲しいけど、焦りは禁物だ。小さな唸り声を上げながら高く上るエレベーターの中を、俺と彼女の吐息だけが満たしていた。

目的の階に着いた事を告げるベルの音に続いて、エレベーターの扉が左右に開かれる。彼女は俺に小さく会釈してから、先にエレベーターから外に出た。不審に思われない様に、俺も続けて降りると、少し彼女との距離を開けるためにポケットにあったガムの包み紙を、近くにあったゴミ箱に捨てた。

どうやら彼女は、この階の看護師に知り合いが多くいるらしい。すれ違った看護師に呼び止められ、にこやかに会話をした後には彼女はまた目指す病室へと歩き出す。それを数回繰り返したところで、ようやく彼女は目的の病室にたどり着いたのか、ノックもせずにその扉を開けて中に入っていた。

俺はすかさず走り寄って、その病室の扉の脇に掛けられている、名札に目をやった。これを見れば、彼女が見舞いに来ている人間が誰なのか、それが手っ取り早くわかるからだ。

「…… 大村、繭。やっぱり、マユなのか…… あ、マユなのか？」

初めて会った時は孤独に怯えていたくせに、今はかなり能天気な俺の大事な友達、幽霊のマユとここに入院している人間が同一人物なのか確かめたくて。いてもたってもいられなくなった俺の体は、頭で考えるよりも先に勝手に動いていた。

トントン

俺の右手がドアを軽くノックした音が聞こえて、俺はハッと我に返って慌てふためく。何故かというところ、もしこの病室に入院しているのが俺の知っているマユだったとしても、俺とマユが知り合ったのがマユが幽霊になった後。つまり、ここにいるマユとは全く面識がないのだから。俺達二人の関係をどうさっきの彼女に説明しろと言うのか……俺は自らの無鉄砲さに頭を抱えた。

しかし、そんな俺の気持ちを全く知らない彼女は、ドアの向こうから俺のノックに対しての返事を返してきたのだ。

「……はい、どうぞ」

その声を聞いた途端、まるでマユに応援されている様な気がした俺は、心の迷いを振り切って右手でゆっくりと病室のドアをスライドさせた。俺の姿を見た途端、ベッドの横に備え付けてある見舞い客用の椅子に腰掛けた彼女は、不思議そうな表情を浮かべた。

それはそうだろう。だって俺と彼女はなんの接点もない、さっきエレベーターの中で顔を合わせただけの他人なのだから。

「あなたは……さっきエレベーターで」

そう尋ねてくる彼女の声には、小さな不審感が含まれていて、少しだけこちらを威嚇するような響きすら感じられた。でも、俺は怯まずに一歩中に入ってしっかりと彼女の目を見つめる。別に悪い事をしにきた訳じゃない、不埒な真似もしない、そういう俺の気持ちを彼女に伝えるために。

やたらと堂々とした俺の態度にきょとんとしながら、マユそっくりな彼女は俺の口から出てくる次の言葉を待っていた。少しだけ緊張で弾む心臓を落ち着かせるために、小さく深呼吸する。

「……こんにちは、俺は新条真人っていいいます」

「ま、真人？　じゃあ、あなたが？」

まずは自己紹介だろう、とぺこりと頭を下げて名乗った俺だったけれど、思わぬリアクションを返してきた彼女に、俺は思わずきょとんとした表情で彼女を見つめた。

さつきも言ったとおり、俺は幽霊になったマユとしか関わりを持っていない。つまり、目の前の彼女とはさつきエレベーターの中で始めて顔を合わせて、そしてたった今言葉を交わしたのも初めての間柄だ。それなのに彼女は、以前から俺の名前を知っていたという風な態度で俺の名前を驚いた様に繰り返した。

「そっか、あなたが繭の……大事な人だから、きつと無意識に名前を漏らしたのね」

「……あの、どういう」

「あ、自己紹介がまだでしたね。私は繭の双子の妹の、大村里佳です、初めまして」

事情が飲み込めずにうまく言葉を返せない俺を、里佳と名乗った彼女はベッドの方に手招きした。なるほど、双子だったのならマユにそっくりな彼女の姿も頷ける。

言われるがままに覗き込むと、そこには隣にいる里佳さんと同じ顔をした、俺が知っているマユ本人が横たわっていた。ただ俺が知っているマユと比べると生気がなく、ずっと眠っているからか髪はボサボサだったけれど。

「あの事故からもう二月が経とうとしているのに、繭は全然目を覚ます気配がなくて……でも、先月の中頃だったかな。今まで誰が何を話しかけても、お医者様がどんなに手を尽くしても反応を示さなかった繭が、突然新条さんの名前を呟いたんです」

「俺の名前を、ですか」

先月の中ごろといえば、ちょうどいつもの公園で、初めてマユと出会った頃だ。幽霊のマユを感じた事、思った事が、多分ここにいるマユの体にも伝わっているのだろう。いや、もしかしたら目に見えない形で幽霊のマユとこの体は繋がっているのかもしれない。

「ところで、里佳さん。マユはどうしてこんな状態になってしまったんですか？」

「あれ……ご存知ないんですか？　じゃあ、どうして新条さんはここにいらっしやったんですか？」

マユが意識不明、及び幽霊になった原因を知りたくて問いかけた俺に、不思議そうに里佳さんは問い返してきた。それはそうだろう、里佳さんからしてみれば俺の事はマユがこうなる前からの知り合いだと認識していると思う。おそらく共通の友人の誰かから話を聞いて、急いで駆けつけたという話の方が説得力はあるだろう。

けれど、その共通の友人の名前に言及されれば、すぐにボロが出てしまう。だから俺は、普段勉強にしか使わない頭を高速回転させて、とっさに理由をでっちあげた。

「いや……なんていうか、俺がここに来たのは偶然、里佳さんを見かけたからなんですよ。マユからは自分が双子だとか、妹がいるとは聞いていなかったの。マユ本人だと思って、里佳さんを追いかけたら偶然ここに入っていくのが見えて。エレベーターで声を掛けようと思ったんですが、なんだか思い切り他人の振りって感じだったので、俺も我慢比べみたいに声を掛けずに様子を窺ってたんですよ。でも……まさか、こんな事になってるなんて」

咄嗟の言い訳にしては、かなり説得力があるんじゃないかと俺は自画自賛した。もちろん、沈痛な面持ちは崩してはいない。平然とこんな事を考えているけれど、俺の内心は複雑な感情が入り混じっていたから。

マユがタケヤマさんの読み通り生霊だった事は、素直に嬉しい。だが、記憶のないマユがこのまますんなりと、眠っている体に戻るのだろうか。そもそも何故、マユは体から抜け出して、生霊なんかになってしまったのか。その原因は一体なんだろうとか。喜びと不安が交互に俺に襲い掛かってくる。

そんな俺の内心の葛藤なんていざ知らず、俺の言葉に納得したのかひとつ頷いて、里佳さんが小さく口を開いた。

「なるほど……だったら、知らなくても無理ないですよ。新条さんは繭の大事な人だし、お話します。あの日、繭に何が起こったのかを。そして、愚かな私の罪を」

少し沈んだ表情に自嘲の笑みを浮かべながら、里佳さんは俺を見

つめながらそう言った。

そして、その後里佳さんが語った言葉の中に、マユが何故生霊になったのかという原因も垣間見る事ができたのだった。

「おい！ 真人くん、こっちこっち」

いつもの様に塾の講習が終わって公園にやってきた俺に、マユが嬉しそうな表情でブンブンと手を振る。何も変わらない、いつもの光景……でも、俺は心の中にあるひとつの決意を秘めていた。

「なんだよ、今日もやるのか？ いつもの人間を驚かせる練習」

「だって、頑張らないといつまで経っても私って落ちこぼれ幽霊だよ？ 未だに真人くん以外には、誰も私を見つけてくれないし」

マユはマユなりに、早く一人前の幽霊になるためにいつも一生懸命だった。でも、もうそんな練習はしなくてもいいんだ。だって、マユはまだ俺と同じ人間なんだから。まだ今なら、こっちに戻ってこれるんだから。

だから俺は、俺と幽霊のマユとの別れのために、話を切り出した。「練習の前に、俺から話があるんだけど……いいか？」

「？ うん、なあに？」

きょとん、とした表情で小首を傾げるマユの仕草に少し緊張をほぐされて、俺は昼間聞いた里佳さんの話を思い出しながら口を開いた。

「俺さ、こないだから塾のない昼の間に、マユの事を色々調べてたんだ。記憶がないマユは、一体どこの誰なんだろうって気になったから」

「そんな……いいのに。私はどうせもう幽霊なんだから、生きてた頃の事を知っても仕方ないよ」

俺の言葉にマユは少し表情を曇らせながら、小さく呟いた。でも、

俺がその言葉に首を横に振るのを見て、マユの表情に不思議そうな色が強く浮かぶ。

「違うんだ、マユ。マユは自分の事を幽霊だと思ってるんだろって、本当は生霊だったんだよ。死んで幽霊になっただけじゃなくて、事故によって体からマユの魂だけが抜け出た……それが、いまのマユだよ」

「事故……？」

理解できないといった様子でぼそりと呟いたマユに、俺はしっかりと頷いてその言葉を肯定した。

「最初にマユが普通の幽霊じゃないって気付いたのは、タケヤマさんだったんだ。タケヤマさん達には足がぼんやりとして見えないのに、マユはサンダルまでくつきりはつきり見えるだろ？ タケヤマさんが言うには、足っていうのは現世との絆のバロメーターなんだって。だから、幽霊の場合は現世との絆は死んだ時点でぶつ切り切れてるから、もちろん足が見えない。でも生霊のマユは、まだ体も魂も生きてるから、足がはつきりと目に見えるんだって」

「た、たまたま……私って突然変異で足が見える幽霊なのかもしれないじゃない」

「……他にも理由がある。タケヤマさん達は自分達の意味で自分の体を人間に見せたり見せられなくしたりできるけれど、マユにはできない。何故なら、今のマユはまだ体と繋がってるから。だから幽霊達みたいに、自分の霊体を自在にコントロールできないんだ」

まさかそんな風に理由をあげられて、否定されるとは思ってなかったのだろ。マユの顔から笑顔が消え失せ、代わりに苦しそうに眉根が寄せられた。

「その話を聞いた俺は、マユが生きてるなら体に再び戻してやりたいて、タケヤマさん達と協力してマユの素性を調べ始めた。俺が病院を手当たり次第に電話して、マユらしい人間が入院してないかどうかを調べる。そしてタケヤマさん達は、マユに似た人や家の中にマユの写真がないかとか、マユに関わりのありそうなものを総当

りで探してくれたんだ。彼等は俺達に見つからずに家の中を覗き見れるから、都合がよかったし」

「……犯罪だよ、それ」

「確かに、な。でもそのおかげで、あるひとつの手掛かりが昨日飛び込んできた。マユにそっくりな女の子が、丘の上にある病院に入っているのを花鳥さんって幽霊が見てて……今日の昼間、その子会ってきた」

俺の言葉を聞いているマユが、頭を押さえて苦しそうに呻く。多分、事故の際に封じ込めてしまった記憶が、今再び彼女の中で呼び起こされようとしているのだろう。

苦しそうなマユの表情を見てると俺も辛いけど、話をやめる訳にはいかない。マユのために、俺のために、そして……里佳さんのためにも。

「その子は大村里佳さんっていう、俺と同じ年の女の子で、やつぱりマユそっくりの外見だったよ。里佳さんは、マユの双子の妹で、お前の見舞いのために病院に通ってたんだ」

「……やめて」

いつもの明るいマユの声とは違い、切羽詰った声で懇願するようにマユは呟いた。それでも、例えばマユを苦しめる様な事になっても、俺はやめるつもりはなかった。

「その病室のベッドには、当然の様にお前が……マユが眠ってたよ。そこで俺は、お前がなんでこんな状態になったのかを、里佳さんに聞いたんだ」

「……やめてってば」

「お前は車に撥ねられて、そのショックで自分の体から魂だけが飛び出ってしまったんだ。原因は、その事故の直前に家を飛び出した里佳さんを追いかけて、そして車に撥ねられそうになった里佳さんをかばったから。違うか？」

「やめてって言うてるでしょうっ！！」

マユの懇願を無視して言葉を紡ぎ続けた俺に、とうとうマユがキ

した。鋭い声を上げて、涙目で俺を睨みつけてくる。しかし、俺はそんなマユの視線に怯む事もない。

「バカッ、真人くんのバカ！ 思い出さなくて、辛くて、悲しい事…… 思い出しちゃったじゃない。ずっと忘れていたかったのに」
すう、と目の端に溜まっていた涙が、ついに決壊して頬に一筋涙の道を作り出す。きっと、徐々にだらうけれど記憶は蘇りかけていたのだろう。そこにさっきの俺の言葉が加わって、一気にマユの記憶は元に戻ったんだと思う。

「里佳さんが泣きながら話してくれたよ。あの日、すごくひどい言葉でマユをなじったって。『死ぬ』『マユなんかいなくなればいいのに』って、心にもない言葉を勢いでぶつけてしまったって…… 後悔してるって言ってたぞ。マユが起きたら、ちゃんと謝りたいって」
「嘘だよ、そんなの」

俺が昼間の病院で見た里佳さんの涙を思い出しながら言った言葉を、マユはあっさりと跳ね除けた。ぼろぼろと絶え間なく流れる涙が伝う頬が、皮肉っぽく吊り上る。

「思い通りになったんだから、里佳は喜んでると思うよ。あの子は、ずっと私が邪魔だったから」

マユがそう強く思い込んだのは、無理のない話かもしれない。

マユと里佳さんは、幼い頃からとても仲のいい双子として、ご近所でも評判だったらしい。一応マユが姉で里佳さんは妹という戸籍上の上下はあったけれど、続柄なんて関係なしに二人は唯一この世で対等の人間として、遠慮なくぶつかっていける相手だった。

でも小学校を卒業する頃になると、二人の間には差がついていた。勉強も運動もマユの方が上で、どんなに努力しても頑張っても里佳さんはマユに追いつけない。いつしか両親や先生、学校の同級生達でさえもマユばかりを褒めて、里佳さんには見向きもなくなっただんだそう。

その頃から、里佳さんはほとんどマユとも両親とも話さず、学校もサボりがちになったらしい。比べられるのがイヤになったのもあ

ったが、マユを知っている人間がいる場所に赴く事が耐えられない苦痛だったからだ。

クラブやカラオケボックスなどで夜な夜な遊びまわるうちに、里佳さんには遊び友達が出来た。彼等はマユを知らないのだから、里佳さんをマユの不出来な妹としてではなく、一個の人間として評価してくれた。それが里佳さんには、たまらなく嬉しく感じられたそうだ。

だが、里佳さんの逃避も長くは続かなかった。何度注意しても夜遊びをやめない里佳さんに、ついに父親の堪忍袋の緒が切れてしまったのだ。頬を張られ、うずくまった里佳さんに父親は激しい怒りと冷たい輕蔑を含んだ言葉をぶつけた。

それは『どうして双子なのにこんなに違うのか』だの、『マユに比べれば、お前などただのクズだ』だの、里佳さんの心をズタズタにするには充分過ぎるほどの威力を持つ言葉達だったのだ。

そしてついに、里佳さんは心の中にくすぶっていた不満を、最悪の形でマユにぶつけた。

「私、知らなかったんだ。里佳がそんな風に私と比べられるのが苦痛だったなんて。だって、里佳は確かに勉強も運動も平均点だったけど、それでも私にはない魅力があったから。明るくて、誰とでもすぐ仲良くなつて、それでいて他人の気持ちを思いやれる優しい心だからすごく、私は里佳が羨ましかったよ。私は里佳とは正反対に人見知り屋だったから」

「双子でいくら同じ容姿をしてても、その人にはなれないだろ。マユはマユで、里佳さんは里佳さんなんだから。その個性を大事にしたらよかったんだよ」

「私はそう思ってたよ。でも、里佳にとってはそうじゃなかった。だから、私は多分幽霊になって目覚めた時に、『大村 繭』っていう人間をやめようと思ったんだ。里佳に言われた事を忘れたかったから、全部記憶を封じ込めちゃったのかもしれないね」

マユは切なそうな笑みを小さく浮かべて、そんな風に言った。確

かに、マユの気持ちはすぐよく解る。きっと里佳さんにぶつけられた言葉は、マユにとっては本当に辛くて悲しくて、そして痛いものばかりだったのだろう。でも、それを怖がって足をずっと止めている訳にもいかない。

「本当に全部捨ててしまいたかった記憶なら、俺が何を話したとしても、マユの記憶は元に戻らなかったはずだ。でも、マユは思い出した……何故ならその記憶たちは、マユにとってかけがえのないものだから。どんなにキツイ言葉をぶつけられても、里佳さんの事を嫌いになれない自分がいるからじゃないのか？」

「……嫌いな訳ないじゃない。たった一人の私の分身なんだから。でも、里佳は私の事憎んでるもん」

「俺は里佳さんの気持ちはさして重要じゃないと思う。一番大事なのは、マユがどう思ってるのかって事だろ？ マユが里佳さんの事好きだつて今でも思ってるなら、それをマユが里佳さんがイヤだつていうくらい、彼女に教えてやればいいんだよ」

「そんなの出来っこないよっ！ 里佳は私が死ねばいいって思うくらい、私の事が嫌いなのに！！」

悲痛な叫びでマユが俺の考えを否定する。どうやら、マユの中で里佳さんがぶつけた言葉はかなり深い傷になって、マユの心を蝕んでいるようだ。でも、それをゆっくり諭してやれるほど、俺も大人じゃなくて。

「出来ないって頭から決め付けるなよ！ 一回ダメでも、何度も何度もぶつかればいいんじゃないかっ！！」

「ヤダよ、もう。またあんな風に拒絶されて、里佳に憎まれたら……私、もう一人じゃ立ち直れないもんっ！」

「なんで一人なんだよ、俺と一緒にいるじゃないかっ！ そんなに俺は頼りないか？ お前を支えるのに役不足なのか！？」

売り言葉に買い言葉、思わず口から出てきてしまった恥ずかしい台詞に、俺は慌てて自分の口を押さえる。でも今さらそんな事をしても間に合わず、一言一句間違はなくマユに届いた様だった。

「……真人くん、私が幽霊じゃなくなっても、一緒にいてくれるの？」

きよとん、とした表情でそんな事を尋ねてくるマユの視線がくすぐたくて、俺は恥ずかしくなつて視線を小さく逸らせた。でもマユは勘弁してくれずに、覗き込むように俺の顔を追いかける。

何度も何度も首を右に左に振る俺を、マユもその都度追いかけてくる。そんな追いかけっこに先に値をあげたのは、やっぱり俺だった。

「あーっ、もう！ そうだよ、ずっと一緒にいたいって思ってる！俺はマユが好きだから、いつの間にか女の子として好きになつてたから！！ だからこんな風に触れない体じゃ困るんだよ、これじゃ抱き締める事もできないんだから」

こんなムードのないシチュエーションで告白するなんて、我ながら最低だと思ひながらも。それでも俺は真っ赤になつてゐるであろう顔をそらす事もなく、しっかりと真正面からマユを見つめ続けた。最初はびっくりしていたマユだったけれど、俺の言葉をようやく理解したのか、瞬間湯沸かし器の様に顔を真っ赤に染めた後、わたしと慌て始めた。

「ホ、ホンキなの？ だって私、真人くんに迷惑ばかり掛けてたし。好きになつてもらえる様な、特技とかもないよ？ それでもいいの？」

「あのなあ……この人はこれができるから好きになろうとか、あの人は貧乏だからちよつとないわとか、損得勘定で恋愛感情が持てる程、俺は器用じゃない。マユが好きな事に明確な理由なんてないから、本当にいつの間にかなんだよ」

ようやつと俺が嘘でも冗談でもなく告白している事がわかったのか、マユは真っ赤な顔のまま、本当に嬉しそうに向日葵の花を思わせるような可愛い笑顔を浮かべた。

「私もきっかけはたくさんあったけど、真人くんを好きになつたのはいつの間にかだったから、おあいこだね。まだ怖いけど、真人く

んと一緒なら、私……頑張れそんな気がする。それに真人くんに触ってもらえないのも、私が真人くんに触れないのも辛いから、元の体に戻りたい気持ちもあるんだけど……」

「けど……なんだ？」

俺の間抜けな告白がきつかけとはいえ、一步足を踏み出そうとしたマユだったのだが、何が不安なのか最後の最後で尻込みをしまっている。もどかしくて思わず問い返してしまった俺だったのだが、その不安は俺が今まで考えた事もなかった盲点だった。

「私が元の体に戻っても、幽霊のマユでいた時の記憶って残ってるのかな？ もし真人くんと一緒に過ごしたこれまでの記憶が消えてしまふなら、私……体になんて戻りたくない。だって、今まで生きてきた中で、一番楽しくて嬉しくて、キラキラした時間だったんだもん。失いたくないよ」

マユは泣きたいのを我慢する様に、くしゃりと顔を歪めながら言った。

確かにその可能性は否定しきれない。何故なら里佳さんの事があったとは言え、マユは幽霊になった時に一度、その記憶を封じ込めてしまっているのだから。

でも、俺はそれに関してはそれ程心配していなかった。

「大丈夫だよ、マユ。もし忘れてしまったとしても、さっきみたいにまた俺が絶対に思い出させてやる。約束するよ」

「でも、もし万が一思い出せなかったとしたら……？」

マユは俺の自信ありげな口調に少しだけ不安が和らいだ様な表情を浮かべたが、完全に払拭するのは難しいようだ。俺だってこんな風に強がってるけど、本当は不安ばかりが頭をよぎってばかりいる臆病者だ。でも、マユと一緒にいる未来を想像すれば、こんな不安は取るに足りない小さなものに思えてくる。だから自信を持ってこ言っんだ。

「もし仮に、マユが俺の事を忘れたままでも、もう一回出会えばいいんだよ……だって、俺はマユの事をしっかり覚えている。だから

どんなに離れたって、絶対に見つけ出せるって確信してるんだ」

「……………強いね、真人くんは。うん、わかった、私も弱気になるのやめるね。そして、絶対真人くんとの想い出を、意地でも忘れないって約束する」

ぎゅっ、と胸の前でガッツポーズしながら、マユはそう宣言した。すると突然、マユの体がキラキラと眩いばかりに光り出し、徐々にマユの体が周りの風景に溶ける様に消えていく。

「ちょっ……………なにこれ、どういう事!？」

「わ、わからないけど! 多分マユの心の中にあっただかまりが解消されたから、魂が体に戻ろうとしてるのかもしれない」

「そんな急に! まだ真人くんにありがとも言っていないのにーっ」
二人でパニックになりながら言葉を交わしている間も、どんどんマユの体は透けていく。

「どうしよう、真人くん! ねえ、どうしよう!？」

「えっと、ええと……………とにかく、明日病院に会いに行くから! しつかり目覚ましとけよ!！」

「ダメッ、きつと髪とかボサボサだし、体も貧相だろうし、絶対ダメッ!！」

こんな時なのに、女の子らしく恥らうマユがおかしくて、もうすぐ別れの時が来るのにニヤニヤと笑ってしまう。

「じゃあ、来年の三月十二日にここで! 時間は夕方五時ちょうどでどうだ!？」

「うんっ、絶対忘れないから! 浮気したら許さなっ……………」

最後まで言い終える前に、マユの体はすうっとその場から消えてなくなり、公園には漆黒の闇と俺だけが残された。

それでも、マユと想いが通じたからなのか、俺の心には空虚感とは正反対の充実感とやる気に満ちていた。なにせ、これから正念場を迎える受験さえ乗り越えたら、マユとの再会が待っているのだ。どうせなら、合格という手土産を持ってマユに会いたい。

「寝坊するなよ、マユ」

俺の眠り姫が無事に目が覚めますように、と祈りながら、俺は自宅への帰路についた。

これで、俺が経験した世にも奇妙な幽霊との逢引の日々は、ひとまずお終い。

え？ 結局マユはちゃんと体に戻れたのかつて？

さあ、それはそちらのご想像にお任せするよ。っと、いけない、待ち合わせに遅れちまう。

あ、そうぞ。一つだけヒントを出すとしたら……俺が今世界中の誰よりも幸せだって事かな。

んじゃ、そういう事で。

（終）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4765n/>

月明かりが照らす公園で

2010年10月8日14時30分発行